

桂園派歌人 高橋古道

兼 清 正 徳

Kodo Takahashi, A Poet of the Keien School

Masanori KANEKIYO

In the early nineteenth century, Kageki Kagawa, who was one of the innovators in the field of waka (Japanese poetry) at the time, and those in his affiliated school, the Keien School, had begun to exert their influence all over the country, while confronting the poets in the Nijo School, who had followed the mediaval tradition, and those in the Kokugaku School (a school of the Japanese classics) which had just emerged.

This paper reports the poetic career of Kodo Takahashi of the Keien School in Gifu and the activities of the Keien poets in the same area on the basis of the data newly provided.

美濃国の桂園派歌人については、さきに「市岡殷政と信濃歌人群」〈信濃第382号〉において、東濃の市岡殷政について記し、次いで「桂園派歌人美濃吉田一族」を〈芸林〉次号において、西濃の吉田利和を中心に据えて記す予定であるが、このほど、岐阜市内外の数か所に史料採訪をおこなって得た記録・詠草などを基底に置いて、高橋古道および中濃岐阜桂園社の動向について記してみた。

安政2年(1855)10月下旬に高橋古道は香川景恒に詠草を送り、これに対する景恒の返歌がある。

古道が詠草に

折々はとはましものを道遠く

心づくしの岡崎のさと (古道)

などあるにかい付てやるうた

ながらへてとはむとおもふ一すぢの

心は常に行かへりけり (景恒)

(長良川)

長柄川にほどちかきわたりなれば、初句其ころあるべし。岡崎の里とよみおこせたるを受たる意なりけり。〔『香川景恒遺稿』〕

高橋古道は、美濃国岐阜中竹屋町の人で、味噌醬油醸造販売を家業とし、初名を善太郎、通称を世襲して善左衛門、号を古道と言ひ、この年21歳である。

〔『岐陽雅人伝』およびこれを受けた『濃飛文教史』などのその後の文献には、父高橋善左衛門善慶と子高橋善左衛門古道とを混同して記している。〕

香川景恒は、桂園派を創始した景樹(桂園・東鳩亭)の嫡子で、天保14年(1843)に景樹が没した後は、京都

上岡崎の東鳩亭を拠点として、全国にわたる桂園社を主宰し、この年33歳である。

若い古道が京都の景恒に詠草を送って指導を仰ぐに先立って、古道より27歳年長の岐阜矢島町浄土宗本誓寺住職光阿が景恒の門人となって、同好の士に呼びかけて景恒を岐阜に迎えて直接の教示を得ていた。

古道の詠草に「折々はとはまし」とあるのも、すでに来岐の景恒に古道は親炙していることを示している。景恒が京都の岡崎と長良川の畔を「行かへり」した来岐の年次については明らかではないが、次の1年ははっきりしている。

文久2年(1862)8月26日から閏8月9日まで景恒は岐阜に滞在して、この間に長良川の鶺鴒を見物した。

岐阜なる古道がもとに遊びける頃、長良川の鶺鴒舟見にものして。

かより火の哀もふかしながら川

うぶねは秋のものにざりける(『香川景恒遺稿』)

友なる古道と共に、いなばの山の麓に語らひくらしけるに。秋興

豊としのいなばの遊びおもひ出て

別れん後もけふをかたらん (同上)

「いなばの山」には景恒の門人の一人である伊奈波神社司官塩谷則満の出雲館の花の寮があり、ここではしばしば桂園社の歌会が開かれている。

いなば山花の寮にて

いつみてもあかぬ所に残りけり

花の木の間のあり明の月

塩谷則満

皆人はこゝろこゝろに出しかど

同じさくらのもとに來にけり

豊島夏海



高橋家略系図

これより以前不明

寛文7年2月9日没 某 本脱大真信士 甚右衛門 元禄11年7月10日没 甚三郎 正徳元年3月18日没 釈空誓

享保7年3月27日没 某 釈宗源 亦左衛門 享保19年8月14日没 釈正圓 初代 善左衛門 米穀商・屋号米善・名字許可 宝暦7年4月7日没・釈浄西

2代 善左衛門 隠居名又左衛門・天明9年正月27日没・釈浄誓 3代 善左衛門 幼名善松・文化10年8月2日没・釈露光

4代 善左衛門 隠居名又左衛門・文政元年3月2日没 70歳・釈宗玄 5代 善左衛門 文政元年9月4日没 33歳・釈浄誓

6代 善左衛門 味噌醬油醸造業・幼名善助・号有道・一貫 隠居名善慶・明治11年1月元日没・70歳 7代 善左衛門 幼名善太郎・号古道・明治24年1月25日没・57歳
妻 岐阜町 総年寄丹羽与三右衛門娘 妻すゑ 名古屋 高松長太郎娘

8代 善左衛門 幼名房治郎・隠居名了孝 昭和16年12月13日没・82歳 9代 善左衛門 幼名弘三・号古山 昭和12年7月12日没・52歳
妻ふさ 大垣 森忠男娘 妻とし 領下 遠藤義一娘
政治郎 半田の小栗家養子

10代 善左衛門 当主 大正2年8月27日生

ことしより伊奈波の山のさくら花

友まつ雪と咲きまがはなむ 片桐春好

(『新選拾玉集』)

塩谷則満 伊奈波神社祠官塩谷好古の子で、天保12年に祠官となり、従五位下・出雲守に叙任された。和歌を景恒に学んだ。明治10年8月18日没、59歳。

則満在職中の安政4年(1857)に参道両側の永代常夜燈の奉納者のうちに高橋善左衛門古道の名がある。

豊島夏海 岐阜中竹屋町の人。通称は徳三郎。手習師匠を業とした。和歌を氷室長翁のち景恒に学んだ。明治28年6月8日に74歳で没した。

片桐春好 岐阜矢島町の縮緬製織業。通称は文七、号は桐園。岩間春樹に書道・歌道を学び、さらに氷室長翁に就き、のち景恒に学んだ。明治36年7月31日に72歳で没した。著書に『桐園家集』があり、岐阜桂園派歌人詠草を集めた『新選拾玉集』がある。

景恒は美江寺観昌院および村瀬澹(蓼園)の家でも当座の歌を詠んでいる。

美江寺観昌院当座 草花得時

秋たちてかたわれなりし月草の

花もさかりになりにける哉 (『香川景恒遺稿』)

蓼園ぬし(村瀬澹)のなり処のたゞずまひ、秋の花野に咲といふかざりをうつしうゑて、こほろぎ葎のねをも枕のものとするなされたや、

よにも心にくきまでなつかしくおもひなりて。

うらやまし簀の下もやちぐさの

花になしたるかくれがの庭 (同上)

古道の歌友村瀬澹は文政10年(1827)の生れで、古道より8歳年長である。通称は篤二郎、号は蓼園、岐阜上竹屋町で蠟燭製造業を営み、屋号は柏屋と言う。終生妻を娶らず、奇人と言えよう。和歌を初め尾張国津島の氷室長翁(景樹門人)に、のち景恒に学び、楊園社を結成して岐阜桂園派の中核となった。明治37年(1904)1月23日に78歳で病没し、浄土宗含政寺に葬られ、墓碑がある。

辞世 ゆふゆふとたゞよひかへる山の端の

雲さへ道に迷はざりけり

古道は澹から扇面蕨の画に賛を求められ、詠草を歌友豊田秋為に送って添削を受けている。

口上

昨日は御かげにて相楽申候。

さて、あはし君御扇子わらびのかたの賛、甚六ヶ敷、漸苦吟仕候。御加筆奉願上候。いづれか。

きのふかもけぶりてふりし春雨の

あとにもえいつるのべのさわらび

折にきて折もらしてもかへる哉

あまりみじかき野べのさわらび

十四日

古道

秋為大人扱下

秋為は「折に来て」の方に点を掛け
折に来て折もらしてもかへる哉
りけん にてはいかゞ
あまりみじかき野べのさわらび
すくな

此かたよろしく候

(秋為宛古道書翰・秋為返翰)

と返翰している。

豊田秋為は文政6年(1823)ごろの生れて、古道より12歳くらい年長である。岐阜中竹屋町に住む画師で、澹と同じく長翁・景恒に和歌を学んだ。明治15年(1882)10月6日没、凡そ60歳、法名は無庵秋為居士、勝林寺に葬られた。その娘冬子も桂園派歌人である。

文久3年(1863)3月20日、古道は景恒に詠草を送り、これに対して景恒は、

いつよりも歌あしく、こはナグリたらんとて、
其よし示しさとし

耳なしの山人ならば郭公

かすかなる音はもらさざるべし

(『香川景恒遺稿』)

と訓戒した。

では、古道は景恒からいつもどのように教示されていたのであろうか。

景恒の添削を受けた古道詠草で残存するものは4冊の小篇にすぎないが、この詠草によって景恒の教示を具体的にみる事ができる。ただし、その年次は明らかでない。

古道詠草第1冊は、49題・60首を収め、そのうち点46首・無点14首であるが、その中から添削のあるもの、あるいは加評のあるものを9首ほど抜いて記してみる。

詠草 古道

野亭梅

(中点)

あすもまたひとりきてみん飛火の
は たれと

野もりが庵の梅のさかりを

春鳥

(長点)

春たてばかた野にもゆる若草の
今日みれ

まだ妻めかぬきとす鳴也
きたりと

閑中春雨

(無点)

よもすがら降春雨は常よりも

猶しづけさの増りけるかな

すこし歌なる所なき心地す

園中若草

(無点)

いかばかりそめつくすらん春雨の

ふるあと青し園の若草

二の句よからず

閑春月

(中点)

絶はてし不破の閑路の春の月

いまはあはれにみる人もなし
かすむと

毎朝聞鶯

(無点)

鶯のなくなるこゑはあさなあさな

きけどもあかぬものにざりける

結句ちからなし

帰雁

(中点)

花をだに帰りみもせで行雁は

なが故郷やこひしかるらん
いかにさびしき旅路な

曙に稲葉山さくらをみて

(長点)

しらじらと引わたしたる朝がすみ

行々みればさくら也けり

海

(無点)

海ばらは遠くかすみで大ぞらに

つらなるかとも思ひける哉

古く侍り

古道詠草第2冊は36題・41首を収め、そのうち点34首・無点7首であるが、その中から添削のあるもの4首を抜いて記してみる。

詠草 古道上

霞隔行舟

(中点)

たちわたる霞のうちにみゆる哉
みるが内に 成にけり

須磨の浦はの海人の釣舟

鶯為友

(短点)

窓ちかく鳴鶯の声きけば
なれし友よりなつかしき哉
にもまさりける

梅香留袖

(短点)

行過る袖のにはほひにおもはずも
打かを

ふりかへりつゝ梅の花みる

みれば さく

滝下款冬

(長点)

落たぎる滝のよどみにやまぶきは
 しぶぎ
 うつろひながら影もみえつゝ
 は

古道詠草第3冊は22題・28首を収め、そのうち点26首・無点2首であるが、その中から添削のあるもの3首を抜いて記してみよう。

詠草

高はし古道上

雨後苗代

(長点)

はやく今朝はれし雨かな苗しろに
 せきいるゝ水はすくなかりけり
 いまだ少し

雨後款冬

(長点)

はる雨の降り跡なるやまぶきの
 ての後の
 花の色のみなつかしき哉
 かはる さへ

款冬盛

(長点)

あまりにも色うつしく咲ぬれば
 一枝はしきやまぶきの花
 折やつまるゝ

古道詠草第4冊は17題・28首を収め、そのうち点22首・無点6首であるが、その中から添削のあるものと加評のあるもの6首を抜いて記してみる。

深夜春雨

(長点)

小夜更てひとりぬるだにさびしきに
 折しも降は春雨のあめ
 しづかに の かな
 折にふれて

(長点)

木の下に立よってみれば梅の花
 手折やすると人のおもはん
 まほしく成にけるかな

霞知春

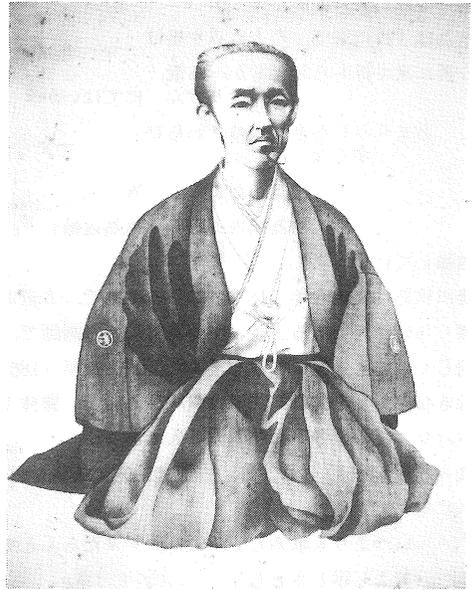
(無点)

あはじしま霞のおくにみゆる哉
 今朝より春や立わたりけん
 霞の奥とは、いかにもはるばる来たる気色に待
 り

春野

(無点)

春のきて霞さがのゝ朝ぼらけ



高橋古道画像

大みや人の若菜摘みゆ

あさぼらけは夜の明がたを申也。さては夜をか
 けて摘に出たる様にや。

春天象

(中点)

東の山の端みればうち霞
 にまづ春立て

かすみてにはふ朝付日哉
 に

春地儀

(長点)

すまのうらに打よする浪の音までも
 あらいそ

春はのどけきものと社ぎけ
 かに聞えけるかな

これらの古道の作歌は、景恒が「ちからなし」「古く侍り」などと評するように、稚拙で生硬であって、桂園派の道標である「しらべ」のある歌に達するには未だ遠しの感があるが、古道は熱心に習作に励む。

明治10年(1877)、長男房治郎に嫁を迎え、新夫婦に訓示して言う、

蓋人間社会ノ交際ハ夫婦ヨリ重キハナシ。故ニ天地
 剖判、掛巻ハ恐ケレド、諸冊兩尊此国土ニ降臨シタ
 マヒ、此道ヲ起シ給ヒテ以降、我人其恩頼ニ因リ、
 子孫相繼テ今日ノ栄ヲ享ケ、豊田老君ノ媒ヲ忝シテ、
 我長男善左衛門ニ森氏ノ長女ヲ娶リ、以テ我家ノ辛
 タラシメントセリ。

嗚呼怡矣。家ノ為メ之ヲ祝シ、身ノ為メ之ヲ賀シ、以
 テ新夫婦ノ兩人ニ示ス。勉メヨヤ、誠意以テ家業ニ

従事シ、我家ノ分限ヲ忘ル、事ナカレ。励メヨヤ、赤心以テ内事ニ委ネ、徒ニ衣服家具ノ美ニ流ル、ナク、専ラ忍耐ノ性ヲ守リ、倫理ヲ紊サズ、節制儉約ハ必ズ吾身ノ余沢ニシテ、即チ一家ノ幸福タル事ニ且暮注念シ、和合共愛ノ天法ヲ遵奉セバ、他日ノ歡樂豈目下ノ比ナランヤ。

明治十年四月二十日

善太郎 古道之印

と。

明治11年(1878)1月1日、父善慶が70歳で没した。辞世の歌がある。

夢の世と聞しにされば夢でなし

聞其名号信心歓喜

本末をいつのまにやら聞きわけて

弥陀にまかせて参る極楽 (『岐陽雅人伝』所収)

この年10月23日に明治天皇は岐阜に御巡幸され、御宿泊所は本願寺別院と定められた。供奉員宿所には市内の豪家が当てられたが、供奉警視本部員12名の宿所は市内常盤町の出口七左衛門家であった。(本稿末尾の美濃桂園派歌人一覧表に、吉田利純すなわち出口七左衛門として記した。)(『岐阜県御巡幸誌』)

天皇御巡幸を祝賀する献詠歌のうち、高橋古道と三浦千春(後記)・村瀬澹・吉田利和(後記)・豊田秋為の献詠を記しておく。

ためしなきひかりをうけて民くさの

こゝろの花も開くみ世かな 岐阜町 高橋善太郎
天雲のはれゆく空のさやかにも

大御光をあふぐけふかな 三浦千春

たかきこのくゝりのみやはしらねども

いままみゆきのあるよなりけり

岐阜平民 村瀬篤二郎

たきのいとたたえみゆきの跡とめて

たきの野のべに君をこうまで

石津郡高須里 吉田耕平

八隅しゝ吾大君 高光る日の御子 神ながら神さび

せずと いでましの国の八十国 みそなはずしまの

八十しま みくるまのめぐらんかぎり おほみまの

いたらむきはみ みたからをむつびめぐまひ 民く

さをなでやはします とほつかみすめらみことの

おほみいづあふぎかしこみ とこしへにつかへま

つらん 国のやそくに しまのやそじま

厚見郡岐阜竹屋町平民 豊田半助

古道の歌師景恒は、慶応元年(1865)に43歳で没したのち、その嫡子景敏は、明治10年に17歳で、景樹→八田知紀→高崎正風と桂園歌風の正統を継ぐ正風に就いて学んでいるが、明治14年(1881)に正風・景敏は名古屋の間島冬道を訪れ、次いで岐阜に来遊した。三浦千春は、

高田建彦の家にて、正風・粲・景敏・古道・夏海・澹など集ひて歌よみけるに。

河秋望 夕されば涼しくなりぬ秋風も

たつか長良の川波の上に(『萩園遺稿』)

と詠んでいる。

景敏・正風は東京から、小出粲は京都から来岐して、千春・古道・澹・夏海らの岐阜桂園派歌人たちと一堂に会して交歓したのである。

香川景敏 景恒の長男。高崎正風を師とし、明治19年に宮内省に出仕して侍従職・御歌掛となった。明治20年10月25日没、27歳。

高崎正風 薩摩国鹿児島藩士として幕末の政局に活躍し、和歌は同藩の八田知紀に学び、維新後は宮内省御歌掛を経て、明治21年設置の御歌所の初代所長となった。45年2月28日没、77歳。

間島冬道 尾張藩士。和歌を景樹最高足の熊谷直好に学び、維新後は大宮県知事などを勤め、明治19年に宮内省御歌掛となった。23年9月30日没、64歳。

小出 粲 石見国浜田藩士。明治10年に宮内省文学御用掛雇となり、25年に御歌所寄人となった。41年4月15日没、76歳。

三浦千春 尾張藩士。和歌を八田知紀らに学んだ。維新後は愛知県・岐阜県の官吏を勤めた。36年11月29日没、76歳。

明治22年(1889)1月に古道は『雑記』1冊を記し、その中に「邦光社兼題」として、

鶴

千年へむ所はこゝとあしたづも

住なれつらむすみよしの浦

雪

年とゝもに新しき世となりけり

明て今朝

ものみなうづむ雪の光にも

閑居早梅

我やどの古葉がくれのうめの花

世にも人にもしられざるらん

老後歳暮

月も日も過て跡なく也にけり

とし月は

残るは年の数のみにして

老の

除夜

暁のかねの音こそきこゆなれ

明ぬまに

こは今年の行にや有らん
堺なる

雪中若菜

ふりつもる雪ふみ分てせり川の

氷のひまのねせり摘まし

亀

万代を我よとなして深淵の
せし

亀の齡の久しからずや
は

雪満群山

名もしらずぬもしらぬ遠山の
峯つゞき

おくにまがはぬ雪の白山
其おくなるは

つくば山は山しき山うづもれて

いつきゆべくもみえぬ雪哉

廿三年八月萩露

月かげのやどりしまゝにこぼれけり

袖にかうけん萩の上露

とある。

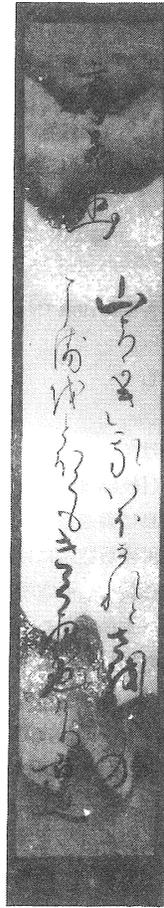
邦光社は、明治21年に、お互いに歌風を競う多くの門流が、自然と他派を非難し合って歌道発展の障碍となっているので、この弊害を除去する目的で、「かたみに語りひかはして、常にあしがきの隔てなく、むつび親しまむ」として、各派各地の歌人に呼びかけ、4月22日に京都で歌会を開き、出席者は300余名、兼題「都花」の詠歌を寄せる者も数百名に及び、かくて山階宮二品大勲位晃親王を社長とし、内大臣三条実美以下千名に近い社員を構成員とし、流派を超越して成立した大歌会であった。

邦光社の岐阜市内の幹事は三浦千春が勤め、会員には豊島夏海・賀島涼潮・村瀬澹・伏島頼之・佐々木涼通・塩谷幸満・鳥居準孝・横山鈴斎・米岡斯近・建部志那雄・長間真道・中山卯・服部作女らが加わっているが、何故か古道の名は『邦光社員仮名簿』に記載されていない。

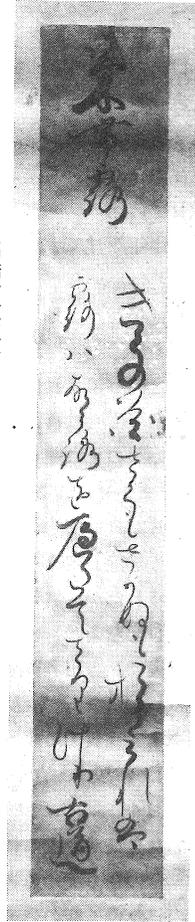
古道としては、邦光社歌会に詠歌を送っても、選に入るだけの力がないと自遜したのであろうか。ともかくも詠歌に精進する一つの道として邦光社兼題の歌を詠み、その添削を三浦千春であろうかに依頼して、歌力を身につけようとしたのであろう。

ちなみに、明治21年8月15日発行の『邦光社歌会第一集』に兼題「都花」の作歌が収載された歌人のうち、岐阜県では三浦千春・塩谷幸満・村瀬澹・豊島夏海・佐々木涼通・賀島涼潮・伏島頼之・渡辺俊明・吉田利和・吉田利清・円空らの105名である。(愛知県は116名・三重県は3名)

上記の歌人たちのうち、吉田利和は高須の人で、早くは景樹高弟の熊谷直好に学び、八田知紀・高崎正風・小出榮とも親交があり、明治38年6月4日に75歳で没しているが、年次不明の下記の歌がある。



高橋古道短冊



岐阜なる高橋古道にはじめてあひけるとき
かねてよりかたらふ君にあらねども
うちとけたるはこゝろなりけり (古道)
とありければ、これが返し。
あはずしてへにけるとしををしとさへ
おもふばかりにおもふ君かな

(利和) (『芦芽集』)

明治24年(1891)に古道は、10年前から心臓病を患い、加えて例年冬には持病の痰に悩んでいたが、1月18日から食事進まず、インフルエンザに苦しみ、21日に青木雄哉医師の診察を乞い、22日には病床に半田の次男小栗政治郎を呼んで臨終の際の諸式について口授し、「諸事(亡父)善慶=準ジ」で略式とし、「沐浴之節多人数打寄り事無用」と示し、

たちまちにけむりとならんこの身ゆへ
ひげもあたまもするにおよばず
と、詠み、位牌については、

表面ハ 積古道

裏ニ 嗚呼天寿尺キタルカ

我ながら魂の行衛をしらぬかな

よろしくたのむ南無阿弥陀仏

と記すこと、「諸事逼塞中」であるので、「古道没後ハ格別逼塞シ、殊更女人方ハ一層儉約之事」と厳しく誡めた。

23日に重湯と鶏肉スープを飲んだが、24日は苦しみ激しく、長男善左衛門房治郎・次男小栗政治郎の看病を受けながら、25日午前6時に逝去した。死亡届に「岐阜市中竹屋町二十九番戸 味噌溜商高橋善左衛門父善太郎五十七年 病名心臓弁膜病」とある。

高橋家当主善左衛門氏の談話によると、古道は家業を疎かにして趣味三昧に暮したので、家勢は頓に衰えたことを自省し、子孫は家業第一に専念して、決して学問・芸能を嗜んではならないと遺言し、一家またよくこれを守ったという。

最後に、古道が残した懐紙・短冊類の歌を記しておく。

寄花懐旧といふことを 古道

はなとまた花はさくよも有ものを

きえにし人はあふよしのなき(高橋家蔵懐紙)

養老の滝を見て 古道

落たぎつ多芸の郡の多度山の

滝の音こそ世にひびきけれ (同家蔵扇面)

菊帯露

きくの花さくもさかぬもおくみれば

露はこゝろをへだてざりけり 古道(同家蔵短冊)

鹿声幽

山ちかき我いほなれどさをしかの

こゑをとほくもきく夜也けり 古道(同上)

山家嵐

なれぬれば中々なれや山風の

たえまに夢はさむる也けり 古道(同上)

水辺山吹

散ぬれば水のこゝろにまかすらむ

よどめばよどむ山吹のはな 古道(同上)

雨後花

うらめしと思ひし雨は晴たれど

ちらまくおしき山ざくらかな 古道(渡辺伝右衛門氏蔵短冊)

水辺夏草

かり残すあやめのひまに影見えて

やどる玉江の月のすゞしさ 古道(同上)

鹿声幽

山ちかき我いほなれどさをしかの

こゑをとほくもきく夜也けり 古道(同上)

氷室朝風

夜半までは氷のうちに籠つらむ

けさたゞならぬうだの山風 古道(同上)

本稿を執筆するに当っては、史料を提供していただいた高橋善左衛門氏に篤く感謝するものである。

(受理 昭和58年1月16日)

美濃桂園派歌人

氏 名	生 年	没 年 月 日	没 齢	住 所 ・ 通 称 ・ 号 ・ 家 業 等
吉田 利充	1790 寛政2年	1855 安政2年・8・9	66	石津郡高須, 詠甫, 商業
吉田 利恭	1822 文政5年	1848 嘉永1年・6・1	27	利充長男, 長左衛門
吉田 利和	1831 天保2年	1905 明治38年・6・4	75	利充2男, 嘉六郎・長右衛門・耕平, 葦舎
吉田 利純	1832 天保3年	1874 明治7年・6・26	43	利充3男, 房七郎・彦一郎, 岐阜出口家養子, 出口七左衛門
吉田 利清	1861 文久1年	1918 大正7年・4・18	58	利和長男, 彦一郎, 葦舎
慶 芸	1792 寛政4年	1850 嘉永3年・7・29	59	不破郡関ヶ原村宗徳寺住職
岩間 春樹	1808 文化5年	1880 明治13年・5・7	73	岐阜, 蔵六, 医師
速水 氏紀	1809 文化6年	1872 明治5年・5・8	64	羽栗郡竹ヶ鼻村, 豊四郎・又四郎, 景幸, 酒造業
浅井 吉行	?	?	?	羽栗郡竹ヶ鼻村, 庄次郎伴, 谷五郎
渡辺 貫勉	1814 文化11年	1866 慶応2年・4・18	53	羽栗郡竹ヶ鼻村, 孫三郎・勉・伝右衛門, 味噌醸造業
渡辺 俊明	1854 安政1年	1931 昭和6年・11・5	78	貫勉子, 佐一郎・伝右衛門, 松園
市岡 殷政	1813 文化10年	1888 明治21年・8・24	76	恵那郡中津川宿, 長右衛門, 土衛・日新亭, 宿本陣
光 阿	1814 文化11年	1875 明治8年・2・9	62	岐阜, 本誓寺住職, のち尾張大森寺住職
佐々木涼通	1816 文化13年	1889 明治22年・2・5	74	岐阜, 蓮生寺住職
塩谷 則満	1819 文政2年	1877 明治10年・8・18	59	岐阜, 伊奈波神社祠官, 幸木・出雲守
塩谷 幸満	1857 安政4年	1932 昭和7年・1・13	76	則満子, 同社祠官, 左一
豊島 夏海	1822 文政5年	1895 明治28年・6・8	74	岐阜, 豊島屋徳三郎
豊田 秋為	1823 文政6年頃	1882 明治15年・10・6	?	岐阜, 画師
豊田 冬子	1850 嘉永3年頃	1907 明治40年・7・2	?	秋為娘
伏島 頼之	1825 文政8年	1901 明治34年・5・11	77	方県郡今川村, 桃廼家, 高富藩士
村瀬 澹	1827 文政10年	1904 明治37年・1・23	78	岐阜, 篤二郎, 蓼園, 蠟燭製造業
三浦 千春	1828 文政11年	1903 明治36年・11・29	76	名古屋のち岐阜, 権左衛門, 萩園, 県職員
片桐 春好	1832 天保3年	1903 明治36年・7・31	72	岐阜, 文七, 桐園, 縮緬製造業
堀田 定英	1834 天保5年	1900 明治33年・7・23	67	岐阜, 九郎三, 酒造業
牧野 義長	1834 天保5年	1908 明治41年・2・8	75	岐阜, 宇右衛門, 儀兵衛, 製菓業
高橋 古道	1835 天保6年	1891 明治24年・1・25	57	岐阜, 善太郎・善左衛門, 味噌醤油製造業
賀島 涼潮	1839 天保10年	1895 明治28年・3・29	57	岐阜, 即徳寺住職
桜園 豪尊	1844 弘化1年	1906 明治39年・5・30	63	不破郡岩手村, 大垣藩士
渡辺 義著	1845 弘化2年	1923 大正12年・2・11	79	岐阜, 大垣藩士, 岐阜貯蓄銀行取締役
円 空	1849 嘉永2年	1891 明治24年・10・28	43	羽栗郡竹ヶ鼻村, 光照寺住職
大沢 起斎	1853 嘉永6年	1932 昭和7年・3・20	80	岐阜, 縮緬製造業
伊藤 正雄	1857 安政4年	1923 大正12年・1・7	67	岐阜
中島 弘海	1859 安政6年	1927 昭和2年・4・19	69	厚見郡北長森村北一色, 淳
参 考				
香川 景樹	1768 明和5年	1843 天保14年・3・27	76	京都上岡崎, 長門介・肥後守, 桂園・東鳩亭
香川 景恒	1823 文政6年	1865 慶応1年・11・16	43	景樹長男, 陸奥介, 東鳩亭
香川 景敏	1861 文久1年	1887 明治20年・10・25	27	景恒長男, 松五郎, 式部